

信は縦系 愛は横系 — 岡崎嘉平太 大空の約束 —

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

全日空が初の中国定期便を運航した1987年、機上には年老いた元2代目社長・岡崎嘉平太(1897-1989)の姿があった。いつか日中の航空路線を開通しようと約束していた中国の元首相・周恩来はすでに他界していた。

岡崎と周の出会いはまだ国交のない1960年代に遡る。経営難に陥っていた全日空のトップとして会社再建にあたる傍ら両国の独自の貿易交渉に奔走した岡崎は1972年の国交回復に際して陰の立役者と呼ばれるようになる。

だが現在より遥かに険悪な東西冷戦下の緊張関係のなかで岡崎が歩んだ道のりはきわめて険しかった。国賊、売国奴、アカの財界人と罵られながら、岡崎を一途に駆り立てたものは何だったのか。その理由を知ることによって歴史に残る民間外交を成立させたビジネスの要諦、そして国家や民族やイデオロギーを超えた人間と人間の普遍的なつながりが見えてくる。

汎アジア主義の立場に

岡崎は現在の岡山県吉備中央町で農家の長男として生まれた。腕白でよく喧嘩して帰ってくると母のふは必ず「譲っておさまるものなら、譲るのが偉いのだ」と諫めた。のちに岡崎は母の教えが自分の生きかたに影響を与えたと語っている。

旧制岡山中学から第一高等学校在学中に中国人



岡崎嘉平太

留学生と親しくなり、アジアの諸民族が団結して欧米による植民地支配から独立するという汎アジア主義に共感した。1922年東京帝国大学法学部卒業後、日本銀行に入学した岡崎はドイツのベルリンや上海に駐在し、激動する国際情勢の渦中で情報収集・分析力やグローバルな視点を培った。

日中戦争下の1939年、42歳で日銀を退職し、日中合弁の華興商業銀行の理事となる。戦時中は大東亜省参事官、上海総領事館参事官などを務め、終戦後の1946年に帰国。公職追放の身になった岡崎は池貝鉄工の社長として会社再建に成功し、1950年に追放処分を解除される。その手腕を買われて翌年から丸善石油の社長に就任した。

1952年、全日空の前身である日本ヘリコプター輸送株式会社の設立に副社長として参画。1961年に社長となり、競合他社との合併などを通じて事業規模を拡大させ、累積赤字に喘いでいた全日空の経営基盤を確立した。

その一方で隣国の中国との経済交流が不可欠と感じていた岡崎は1962年、電源開発総裁や通産相を歴任した高碓達之助を団長とする貿易交渉の

副団長として訪中し、日中覚書貿易協定の調印に立ち会った。翌年から団長として日中国交回復に至るまで毎年訪中する。

行って会って交わる外交観

貿易交渉の過程で周恩来の意向を受けた中国側代表の廖承志は日中航空機の相互乗り入れを提案した。岡崎は定期航路の開設を熱心に説いたものの、台湾国民党政権を支持する日本政府は頑なに拒否し、臨時便の発着も認めなかった。

世間的にも岡崎への風あたりは強く、右翼団体が自宅を取り囲んだり、頻繁に脅迫電話をかけてきたことから警察が警護するようになった。危険な状況を知った周恩来は岡崎の長男に「われわれは友情のために自分の生死をかけるような人を本当に信用する」と伝えたという。

1966年、全日空機の羽田沖墜落、松山沖墜落と相次いで重大な航空事故が発生し、岡崎は政財界から日中問題に深入りして安全対策が疎かになったと批判された。経団連会長の石坂泰三にも退陣を迫られ、翌年社長を辞任する。

それでも岡崎は日中関係に携わることをやめなかった。「経営というのは国の経営でも会社の経営でも同じだ」と経営者の観点から独自の外交観を抱いていた。「これからの外交は昔のマキャベリズムのように相手国の弱点を探し出してその弱点を攻撃するというよりも、相手の長所を見い出してその点で交わっていくという風にならなければならぬ」と。

もっとも大切なのは一方的な偏見や先入観や思い込みで判断するのではなく正確に事実を把握することだ。岡崎は「共産主義の国が悪いと思うなら、それだけにかえてますます研究して相手の状況を十分に知ることが大切だと思うのです。お互いに両立できる場所を探し出して両立するように、両立できないところはお互いが適当に避けるように工夫していくべきでしょう」と根強い中国敵視論に反論した。

そして実情を的確に判断するために「中国を知るには中国に行ってみることだ」と実際に行き相手と会って直接交流することに精魂を傾けた。

「自由陣営に属しない者の悪口を言い、蹴とばしてすむか」と、そういうわけにはまいりません。まず相手を知る。とにかく体をもって行ってみる。向こうの人と直接会ってみる。直接向こうの実情を見たくてわれわれの否応を判断しなきゃいけない」と行動の重要性を繰り返し力説している。

相手の弱みを探して攻撃するのではなく互いに両立できる場所を見出して交わっていくという岡崎の外交観は「日本人民と中国人民は共に日本軍国主義の被害者である」と軍部から人民を切り離して未来志向を提唱した周恩来の政治的リアリズムと相通じるものがあった。

人の世を美しく織り成す

悲願の日中国交回復に際して岡崎は田中角栄首相をはじめとする日本代表団のメンバーに選ばれなかった。周恩来は日中共同声明調印の記念式典に先立ち岡崎ら永年の功労者を招いて祝賀会を開いた。席上、周恩来は中国の格言である飲水思源を引用して「水を飲むときには井戸を掘ってくれた人のことを忘れない。まもなく田中総理が来られて国交が回復する。しかし井戸を掘ってくれたのはあなた方です」と岡崎らの労をねぎらった。

1976年に周恩来が死去したあとも岡崎は日中経済協会常任顧問として活動し、生涯の訪中回数は101回に及んだ。1989年、自宅の階段で転倒して頭部を強打し、92歳で帰らぬ人となる。

翌年、岡崎の遺産と全日空の寄付でアジア人留学生を支援する岡崎嘉平太国際奨学財団が設立された。岡崎が日中関係、とりわけ周恩来との交流を通じて追求したものは「人と人との間柄の美しさに勝る美しさはないであろう。私が『信は縦系 愛は横系 織り成せ人の世を美しく』というのはまさにこのことである」という言葉に集約されている。

全日空は岡崎の意志を継いで1987年、待望の日中定期路線を開通した。初のフライトは女子社員の総意で岡崎の誕生日である4月16日に決まった。周恩来との約束を果たした1番機はこの日90歳を迎えた岡崎を乗せて北京へ飛び立った。